



大気を引き裂く音は、鼓膜を震わせる物理的な衝撃波となって日野勇太の脳髄を揺さぶった。

新宿ピカデリーのファサードを構成する巨大なガラス壁が、背後から迫る高圧水流の質量によって一瞬で網目状の亀裂を生じ、次の瞬間には白濁した粉塵となって飛散する。篠原誠司の使役するエリザモンが変異を遂げた姿—成熟期でありながら完全体級の出力を誇るマリブルモンが放ったそれは、もはや単なる水の塊ではなかった。超高圧で圧縮された液体は、触れるものすべてを削り取る分子の鋸刃と化している。

「勇太君、上へ！」

並走する烏藤すみれの叫びが、パワードスーツに内蔵された通信スピーカーを通じて、こもった電子音として響く。

(この距離でも電波障害が…! やりにくいわね…!)

勇太は思考を介さずに応じた。彼の足元、ひび割れたD-3から供給される風のスピリットが、肉体の一部を強制的に組み替えていく。

フェアリモンの脚で、都道430号の湿ったアスファルトを蹴り、垂直なビルのガラス壁面へと肉体を送り出す。重力を欺く不自然な起動。

視界の端で、濃い霧が染まる。

後方わずか数メートル。ガラスを粉碎しながら追尾してくる水流の先端が、勇太の背中を、その皮膚感覚を鋭く愛撫する。

皮膚が焼き切れるような錯覚。勇太は空中に身を躍らせながら、フェアリモンの脚から発生する大気の渦を反転させた。

大気圧の局所的圧縮、彼の手のひらから放たれた目に見えぬ空気の弾丸が、迫り来る水流の頭部へと正確に激突する。

同時に、並んで跳躍したシンドウラモンが、その巨大な羽に握った宝杵を振り下ろした。

凄絶な火花、放たれた高圧の電撃が、大気弾によって一瞬だけ直進性を失った水流と交錯する。

だが、マリブルモンが構築した水壁は、純水に近い組成へと強制的にデータが書き換えられていた。

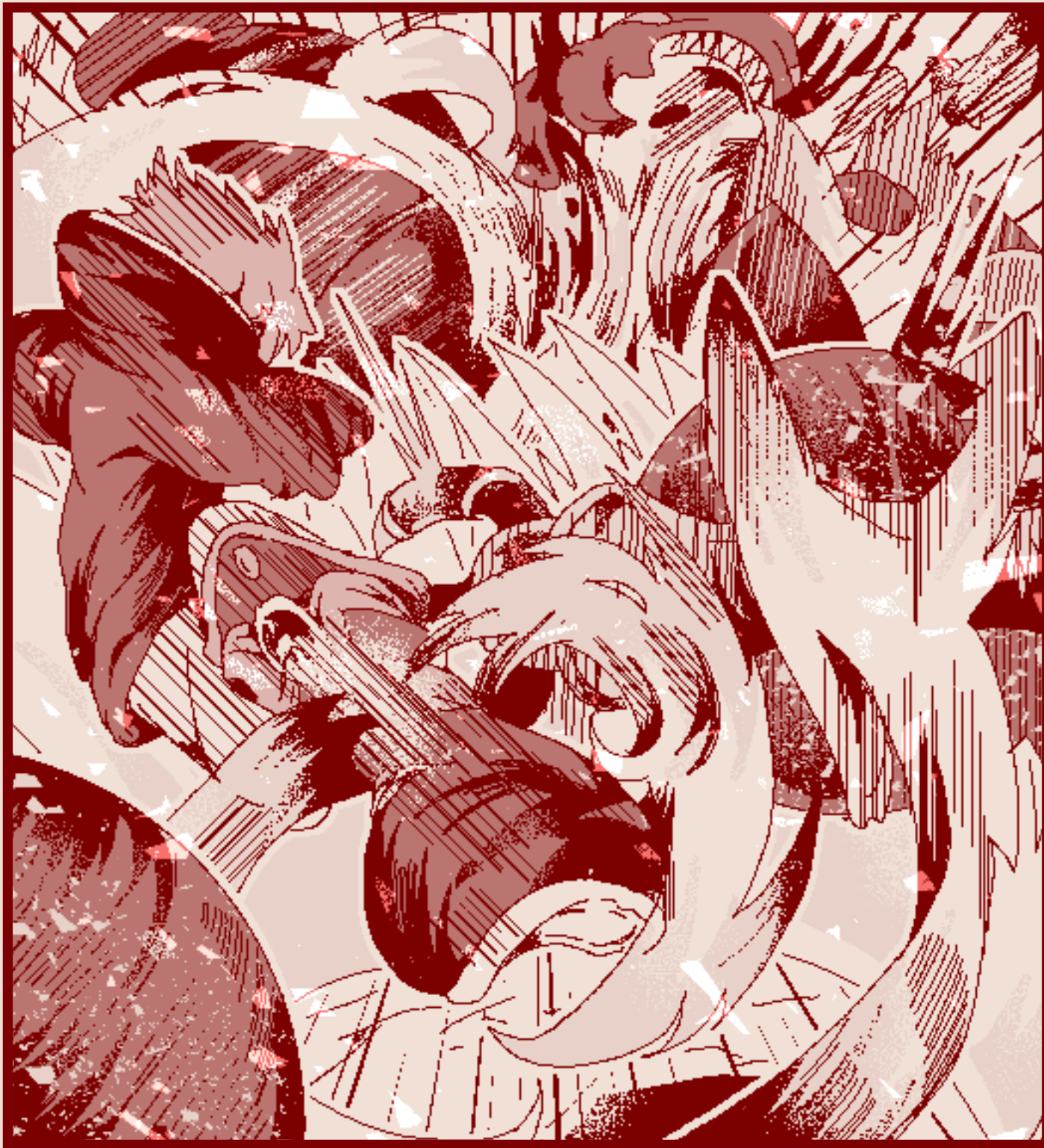
電気伝導率を極限まで引き下げられた液体の盾は、シンドウラモンの電撃を表面で拡散させ、その牙城を崩さない。

「ちッ、そりゃあ対策してるわよね…！」

すみれの舌打ちが聞こえた瞬間、液体の鋸刃がシンドウラモンの巨体を正面から捉えた。

炸裂する衝撃、しかし、シンドウラモンは一瞬の判断で、球体を模した頑強な鎧の中に、その長い首と四肢を完全に引き込んでいた。金属と肉が擦れ合うおぞましい軋み音が霧のなかに溶けていく。

水流の質量に押し潰されながらも、鎧の曲面が破壊エネルギーを物理的に逃がした。



激突の反動で生じた濃密な水蒸気の向こう側で、シンドウラモンの球体が弾むように着地する。

その強靱な防御力を視認した勇太の脳内で、計算が滑るように完了した。

「おばちゃん、そのまま!!」

「!?…!あいよ!勇ちゃん!!!」

シンドウラモンが勇太の意を汲み球体のまま回転していく。

勇太はサイドポケットから閃光弾を引き抜いた。

それを、フェアリモンの脚によって生み出された局所的な真空の目へと放り込む。空気の屈折率を意図的に歪められた領域…閃光弾は、マリンプルモンの網膜に向かって直進するその瞬間まで、濃霧の中に完全にその視覚的実体を消失させていた。それが、マリンプルモンという予測に致命的なエラーを引き起こす。

巨獣の直前、一寸の猶予もなく炸裂したマグネシウムの光球が、マリンプルモンの眼を白濁した盲目に陥れた。

苦悶の咆哮、巨躯がバランスを崩し、新宿のビル群を揺るがす。

「今だ!」「あいよ!」

勇太はフェアリモンの脚をさらに加速させ、周囲の霧を編み上げるようにして、風の紐—超高密度の流体ロープを構築した。

それをシンドウラモンの球体をガッチリと掴む。

遠心力と風圧の相乗効果、勇太は自身の肉体を軸に、完全体の質量を持つ球体を弾丸のように激しく振り回した。

引き絞られる大気、一閃。

投げ飛ばされたシンドウラモンが、視界を奪われたマリンプルモンの強固な水壁へと正面から衝突する。

純水のシールドが、物理的な運動エネルギーの前に激しく弾け飛んだ。

すかさず勇太は風の紐を手繰り寄せ、バウンドした球体を再び引き戻し、さらに出力を増して叩きつける。

「もうっ!!!! 発!!!!」

二度、三度。執拗なまでの反復攻撃、球体の表面から漏れ出す残留電撃が、マリンプルモンの体組織を内側から焼き焦がしていく。

おぞましい液状の肉が弾ける臭気が、霧の中に拡散した。

最後の咆哮とともに、シンドウラモンの質量がマリンプルモンの頭部左側面に直撃する。

硬質な結晶構造を持っていた左側の角が、根元から狂おしくへし折れ、アスファルトの上へと転がった。



マリブルモンの損壊を目の当たりにした篠原の視線が、一瞬だけ驚愕に揺らいだ。男の顔に、明確な隙が生じた。

「ッ！」

その一瞬を、烏藤すみれは見逃さなかった。

彼女のパワードスーツが、背部に設置された蓄圧タンクから一気に対圧ガスを噴出させる。

人間の肉体限界を超える加速、すみれは獣さながらの起動で誠司の頭上へと躍り出た。

誠司はスーツを着用したすみれの接近を視認し、そのデジソウルを右腕に集中させて迎撃の構えを取る。

空中、近接戦を展開しつつ2人はビルを駆け上がる。

すみれは右腕に固定されたテザーガンのトリガーを引いた。

放たれた二本の電極針が、誠司の顔面へと肉薄する。

だが、篠原の反応速度もまた、デジソウルによって強化されていた。

彼はデジソウルを纏った手のひらで、容赦なくそのワイヤーを掴み取り、軌道を強制的に逸らす。

すみれが放ったのは、通常のテザーではない。電極の先端に仕込まれたレアアース磁石が、誠司の腕に接触した瞬間、極性を反転させて相互に猛烈な吸引力を発生させた。

掴んだはずのワイヤーが、生き物のように誠司の腕と胴体を絡め取り、その自由を奪う。

「しまーっ!？」

「しゃんなろう!!!!」

すみれの硬質なブーツが、自由を失った誠司の胸骨へと正確に叩き込まれた。

パワードスーツの質量と、重力加速度の結合、篠原の肉体は、弾丸のような速度で硬い路面へと叩きつけられた。アスファルトが砕け、彼の背中から微細な血霧が吹き出す。しかし、限界まで高められたデジソウルの肉体強化が、彼の骨組織が完全に粉碎されることだけは辛うじて防いでいた。



「すみれさん!!」「勇太君!!」

着地したすみれの隣に、勇太が滑り込むようにして合流した。

路面を転がる誠司に対し、二人は容赦のない近接格闘戦を挑む。

パワードスーツの機械的な打撃と、フェアリモンの脚がもたらす風圧の結合。

誠司は口元から血を流しながらも、泥臭く立ち上がった。彼の繰り出す拳には、かつて神奈川県警の過酷な現場で培った冷徹な逮捕術の型が刻まれている。無駄のない軌道、体重移動。勇太の空気操作が、その肉弾戦の隙間を埋めるように駆動した。誠司の拳が勇太の顔面に届く直前、局所的な高気圧の壁が誠司の関節の可動域をわずかに狂わせる。

すみれのローキックが、その狂いを見逃さずに誠司の膝裏を捉える。

数的な優位、そして迷いのない連携が、確実に誠司を追い詰めていた。

勇太の風が誠司の視界を霧で遮り、すみれの拳がその顎を的確に打ち抜く。

泥と血、そしてパワードスーツの排熱が、雨の新宿に陰惨な格闘の空間を形作っていた。

だが、その均衡は唐突に破られる。

濃霧の奥、都庁方面から伸びる影が、凄絶な質量となって空間を圧殺した。

「ぐっっ!!」

シンドウラモンの巨体が、まるでただの肉塊のように前方へと吹き飛ばされてきた。

その表面の鎧には、深々と巨大な爪痕が刻まれ、そこから微細な発光データが血のように滴っている。

激突の衝撃で、シンドウラモンが保持していた宝杵が手元から離れ、遙か後方の瓦礫の中へと没した。

霧を割って現れたのは、角を失い、怒りによってその組成をさらに兇悪に変異させたマリブルモンだった。

巨獣の右腕が、大気を圧縮しながら勇太たちの頭上へと振り下ろされる。それはビル一つを容易に押し潰す質量の暴力。

「…終わりだ。」

誠司の冷酷な呟き。

勇太は一步も引かなかった。

彼の網膜の裏側で、家族が、茜が、傷ついていく光景がフラッシュバックする。

これ以上、俺のせいで誰かが傷つくのは嫌だ。

その激情が、彼の肉体を突き動かす。

勇太は両腕を前で組み集中する。

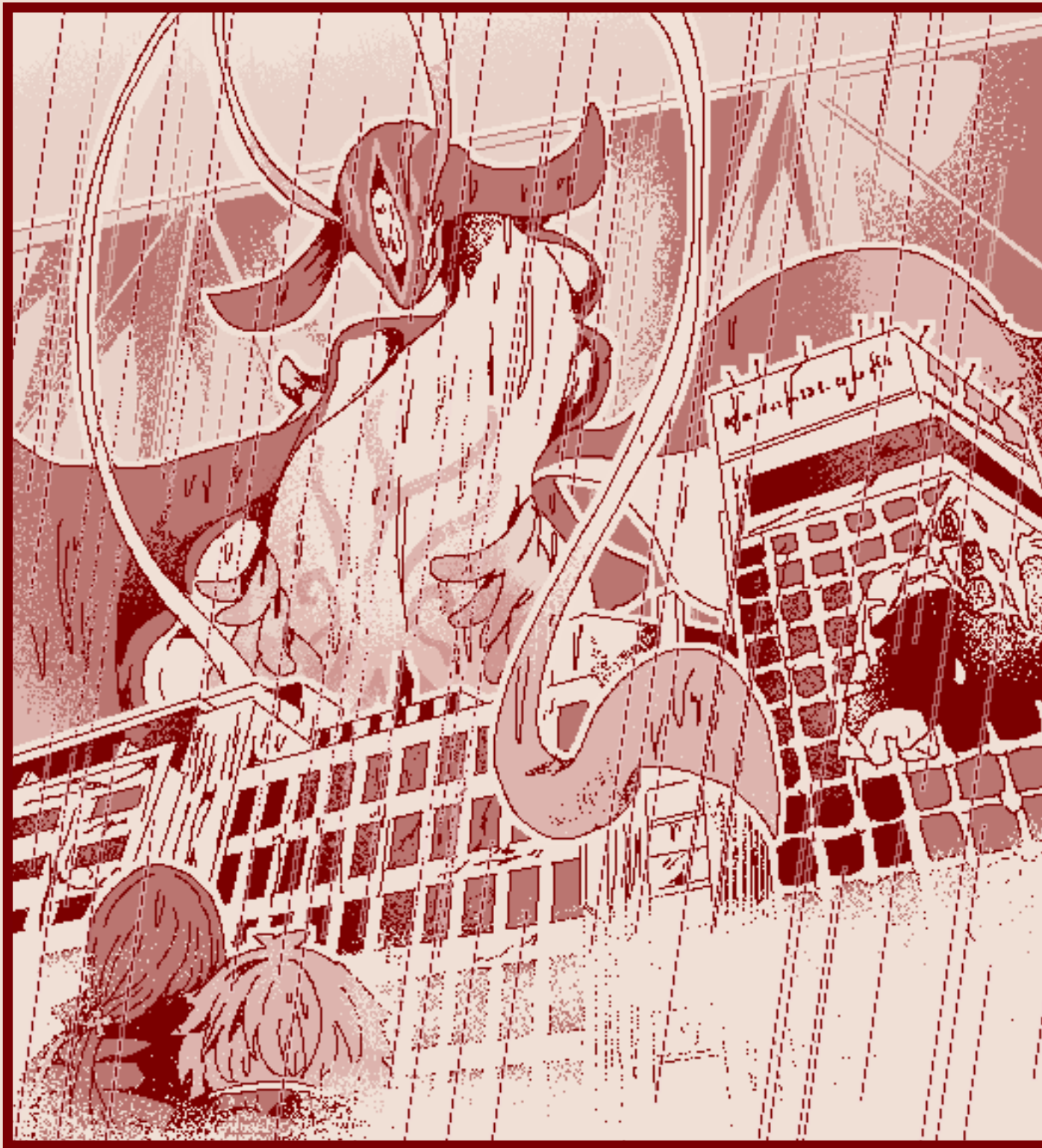
フェアリモンの脚から供給される全エネルギーを大気操作へと注ぎ込んだ。

流体力学の限界を超えた超高密度空気壁と言える風の手が、二人の頭上に顕現する。

マリブルモンの巨大な質量が、目に見えぬ空気の掌へと衝突した。

凄絶な金属音に似た大気の悲鳴。勇太の足元の路面が円状に陥没し、彼の脚の皮膚が、毛細血管の破裂によって赤黒く染まっていく。

だが、その腕は、絶望の質量を確かに受け止めていた。



「ふう…、無駄な真似を。」

泥塗れの路面に膝をついたまま、篠原誠司は楕円形の眼鏡の奥にある、完全に光を失った瞳で勇太を見つめた。

その自意識は、目の前の少年の気高い志を、ただの反吐が出るような偽善としてしか認識していない。

「マリブルモン。もういい…面倒だ…その姿（レイヤー）を開放しろ」

誠司の低く、乾いた声が響く。

マリブルモンの巨躯が、内側から溢れ出す圧倒的な情報量によって、おぞましく膨張を開始した。テクスチャーデータが高速で書き換えられ、肉と機械の境界が消失していく。

新宿の濃厚な霧が、そのデジモンの存在そのものに吸い込まれるようにして、渦を巻いた。

現れたのは、深海の神話を具現化したかのような、圧倒的な威容を持つ究極体…リュウグウモンであった。

半壊したビルの屋上、あるいはその天空に君臨したその姿は、あまりにも神秘的であり、同時に見る者の精神を摩耗させる威圧感に満ちていた。

半透明の美しい鱗の奥に見え隠れする、無数の発光器官と、機械的な冷徹さ。それはデジタルワールド・シャンバラの海を領分とする、文字通りの「神」の一角。

その存在が放つ、絶対的な格差の圧力。

都道 430 号に佇む勇太とすみれの肉体は、リュウグウモンが発する静かな威圧の前に、一瞬完全に硬直した。

皮膚が粟立ち、胃の奥から酸っぱい塊がせり上がってくる。

人間という有機生命体が、上位の電腦神格を前にした際の一方的な痛覚。世界そのものが彼らを拒絶しているかのような、圧倒的な絶望感が空間を支配した。

「…日野、それでもその目ができるか？」



リュウグウモンの額に位置する発光結晶が、不吉な明滅を刻んだ。
情報の演算。次の瞬間、照準を合わされた空間へ向けて、音もなく、しかし絶対的な死の光線…無数のレーザーが乱射された。
大気が一瞬で電離し、超高温の熱線が路面を、ビルを、分子レベルで融解させていく。
「アカン、すみれちゃん!! 勇ちゃん!!! それだけは…っ!!!」
满身創痕のシンドウラモンが、その巨体を駆動させた。
すみれを守るという、その一糸乱れぬ愛着構造…完全体の限界を超えたデータ演算が、シンドウラモンの組成を強制的に、ハウオウモンへと一時的に跳ね上げる。
金色に輝く聖なる羽が、勇太たちの前に展開される…直撃する無数の光の閃。
激突。
ハウオウモンの盾は熱線のエネルギーを極限まで拡散・軽減させたが、究極体の圧倒的なデータ出力の前には、あまりにも脆弱だった。金色の羽が炭化し、剥がれ落ちていく。
悲痛な絶叫が響き、強制的に退化させた。
光の粒子を撒き散らしながら、鳳凰から元の傷だらけの鶏の姿に戻ったシンドウラモンが路面へと転がる。
だが、リュウグウモンの額からのレーザーは止まらない。
拡散した熱線の残滓が、パワードスーツの破損によって動けないすみれの肉体へと降り注ぐ。
「すみれさんっ!!!」
勇太の思考は完全に消失していた。
彼は、家族を守れなかった自身の無力さを呪うトラウマの引き金を引かれた。
肉体が勝手に跳躍する。彼はすみれの身体の上に自らの肉体を投げ出し、覆い被さるようにして、その背中で絶望の残光を受け止めた。



凄絶な爆煙と、焦熱の臭気が新宿の街を包み込む。
しかし、恐るべき熱線の持続は唐突に途絶えた。
ビルの上に君臨していたリュウグウモンの巨躯が、激しいノイズとともに、強制的にマリブルモンの姿へと縮小・退化していく。
テイマーになって日が浅い誠司の精神力（デジソウル）は、究極体の維持に必要な莫大な演算負荷に耐えきれなかったのだ。誠司は膝をつき、激しく血を吐いた。
眼鏡のレンズが、彼自身の吐しゃ物と泥で汚れる。凄まじい疲弊。
煙が、雨によって徐々に這い寄るように晴れていく。
そこに広がっていたのは、陰惨極まる地獄の縮図だった。
ポロポロになったシンドウラモンが、意識を失ったすみれをその短い翼で抱きかかえるようにして、泥の中にうずくまっている。
すみれは吹き飛んだビルのコンクリート塊によって右腎臓部分を強烈に強打していた。彼女の口元から、どす黒い胃液と血が混ざり合ったものが嘔吐物となって路面に溢れ出る。
スーツの警告音が、内部的な重篤な損傷を冷酷に告げていた。
そして、その前に、仁王立ちで立っているのが、日野勇太だった。
少年の肉体は、文字通り引き裂かれていた。リュウグウモンのレーザーが飛散させた無数のガラス片が、彼の顔面、胸部、脚部の皮膚を執拗に切り刻み、肉の裂け目からおぞましい赤色の血が絶え間なく溢れている。
何より凄惨なのは、彼の右手だった。
爆風でへし折れたビルの鉄筋…錆びつき、尖った金属の棒が、彼の右腕の上腕筋を完全に貫通していた。
肉を突き破り、裏側へと飛び出した赤黒い鉄骨。
幸いにも太い動脈は避けていたが、引き裂かれた筋肉の繊維が、少年の呼吸に合わせて狂おしく蠢いている。
激痛の筈だったが…だが、勇太の瞳には、痛覚を超越した、心を殺した絶対的な光が宿っていた。



誠司はその光景…何よりその少年の瞳を直視し、自らの内側にある自意識を激しく抉られた。

生理的な嫌悪感が、彼の胃を締め付ける。

「…もう止めろ。」

「…えっ？」

誠司は掠れた声で、絞り出すように言った。

「その女達を連れて、消えろ。」

お前たちが何をしようと、この世界は変わらない。すべては神（セラフィモン）の秩序の中に収束する…無駄な血を流すな。」

勇太がすみれを視界に入れる。

自身の流す血と過呼吸によって狭まっていく。

（また、俺のせいで。俺が…すみれさんが…。）

自身の居場所を奪われ、大切な人が壊されていく不条理。彼の胸の奥で、防衛反応としての恐怖が急速に膨張し、喉を詰まらせる。

ヒィ、ヒィ、という情けない呼吸音が、雨音に消える。

だが、その時、泥の中に伏したすみれが、震える指先で、勇太のカーゴパンツの裾を確かに掴んだ。

彼女の濁った、しかし確かな意思を宿した瞳が、勇太を見つめる。読み取れはしないしかし強い意志がその視線から語っていた。

シンドウラモンもまた、ポロポロの首を振り、勇太に向けて静かに頷く。

彼らは、少年を責めてなどいなかった。

勇太は、その温かい、重圧を網膜に焼き付け、過呼吸が止まる。

少年は、錆びた鉄筋が突き刺さった右腕をだらしと下げたまま、篠原誠司を真っ直ぐに見据えた。

その瞳の、一切の迷いを排した透明な輝きに、誠司は自身の唇を、血が溢れるほど激しく噛み切った。

自意識が、嫉妬と劣等感でひりひりと焼け焦げる。

「なぜだ…！」

誠司は狂おしくも叫んだ。

「お前は、耐えられるのか!?その女も!デジモンも!お前にとっては大切な存在のはずだ!それが今傷ついている!!

お前は…俺と同じだ!!理解している筈だ!

その自己陶酔のエゴが周囲を破滅させる恐怖を!なのになぜ、そんな目で…俺を…！」

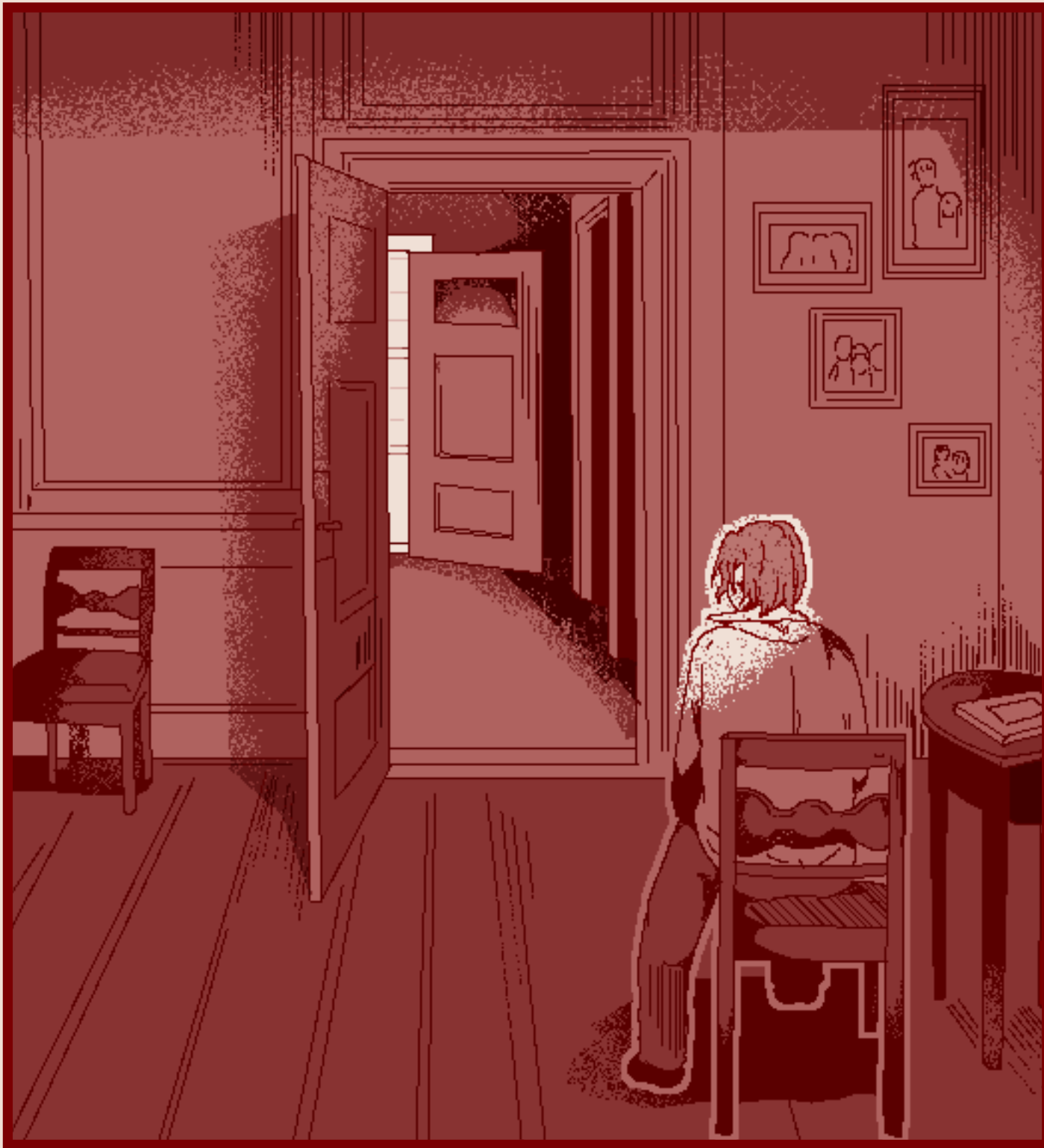
「…今でも…怖い。」

勇太は、痛々しく、しかし明確な声で応じた。

「俺のせいでみんなが傷つくのは、自分じゃないから…その命を償えないから…。

だけど…それでも…それでも!尚も俺の胸の奥には…上手く言えないけど…まだ熱いものが燻っているんだ!

あの男と俺が母さん達におっ被せた理不尽も!セラフィモンの狂った正義も俺は、絶対に許さない…!!だから!!!」



燻る熱。その言葉が、誠司の脳裏に、かつて自身が誇りを持っていたにフラッシュバックさせた。

若き日の篠原は、その熱を持った目を持っていた…自分は白の中にいる。その確信があった。

あの時の自分にも、確かにその熱があった。

だが、その熱の代償はあまりにも凄惨だった。

組織の逆恨み。同僚の裏切り。自宅のドアを開けた瞬間に、彼の鼻腔を突いた、おぞましい有機物の腐敗臭と、鉄の臭気。

リビングの床に転がっていた、妻と娘の肉体。

トクリュウの獣どもによって、あらゆる尊厳を奪われ、肉塊へと変えられた最愛の家族。

気丈に振る舞いながら捜査を続けた自分を、SNSの電腦空間で「冷酷な夫」「点数稼ぎの警察官」と叩き続けた、顔の見えぬ現代人たちの過剰な自意識。

誠司の魂は、その時に完全に折れていた。

自身のいる白はただの虚無であった。

もう、何も考えたくない。自分の正義が、家族を殺したのだという現実から、ただ目を背けたかった。



セラフィモンから提示された「考えることを放棄する楽園」への切符。

その前条件として、篠原は独房の中にいた犯人たちの元へと手引きされた。そこからは、ただの屠殺だった。

誠司はデジソウルの力を使い、素手で犯人たちの顔面を殴り続けた。

指先が震えている。いや、これは震えではない。高揚と嫌悪が混ざり合い、神経系が異物を排除しようとする拒絶反応だ。

目の前に転がる肉の山は、先ほどまで「人間」と呼ばれていたものだ。

犯人の顔面は打撃の衝撃で内側から崩壊し、皮と肉がぐずぐずに混ざり合って、まるで熟れ過ぎた果実のように歪な形をしている。

誠司は自分の拳を見下ろした。関節は皮膚を突き破り、指先には赤黒い肉片と、絡みついた髪の毛がへばりついている。

自身の衣服に飛び散った返り血が、雨に濡れて生温かく肌を伝う。その不快感は、あたかも自分の身体が汚染されていくような感覚に似ていた。

短い人生の中で誰にも見られたくない自分がある。

「…気は晴れましたか？」

背後からの声に、篠原の思考は鈍く反応した。

セラフィモンがその場に似つかわしくない張り付いた笑顔で語り掛ける。

「…。」

誠司は目線のみで返した…感情の起伏はないが心情を雄弁に語っていた。

気が晴れるどころか、内側から自分という人間が死滅していくような、空虚な平坦さだけが広がっていた。

妻の叫びも、娘の怯えも、復讐という行為によって塗りつぶされたと思っていた。

だが現実には、復讐したという事実が、かえって彼らとの断絶を確定的なものとして突きつけてくる。

誠司にとっての復讐は、救済ではなく、自らへの死刑宣告に過ぎなかった。



復讐を終えた今、誠司の脳裏には妻と娘の断末魔が、かつてないほど鮮明に再生されていた。

犯人を翫り殺しにしても、何も終わらなかった。自分はただ、死者に対する贖罪の機会を永遠に失ったのだ。

救われない…復讐で救われるのは、まだ人生を歩む気持ちがある奴だけだ…。

自分の選択で家族を死なせた自分に、その資格などあるわけがない。

思考からどろりとした疲労感が滲み出る。

(俺はどこへ向かおうとしていたんだ…警察に戻るのか？家族が俺に残した使命(正義) そうだ…俺の命にはその使命を背負ったんだ。

…家族を殺した俺が？使命の果てに何がある？夢のあとに何が残る？考え出すと切りのない虚無の中を思考が彷徨い吐き気がする。

…もういい…もう…疲れた。)

それは疲労ではない、自分の存在そのものが、この世界にとっての「バグ」であるという確信。

何も考えたくない…妻子の最後を思い出すことも、自分の罪を呪うことも、すべて思考の端から消し去りたい。

「…協力する。

代償としてデザイアリングをよこせ。

この意識という名の地獄から、俺を連れ出してくれ…。」

「ええ、しかし私が欲しいのはその原罪(獣)、渡すのは全てが終わってからです。」

誠司にとってのセラフィモンへの協力は、他者への奉仕ではない。自分を殺すための、緩慢な自殺志願であった。

その瞳には、すでに死の色が宿っていた。

かつて正義を信じていた刑事の残骸は、いまや魂を売り渡すことだけに安らぎを見出す、成れの果てに過ぎない。

ただ、思考の端の端に一瞬だけ蜃気楼のようにいつか自分が持っていた熱を感じる。(…分かっている。

だが俺は…あるいは、同じ熱を…夢を持った誰かが…この抜け殻を壊してくれるか?)



篠原は、新宿ピカデリー前の雨に煙る戦場に立っていた。
かつて正義に燃えていた刑事の面影は、今や冷徹なまでの虚無に覆われている。
しかし、その虚無の奥底には、自分を否定する熱を持った少年が自分を否定してくれる…羨望が燻った。
「日野!!!お前もいずれ!!!」
誠司は喉の奥から絞り出すように叫んだ。
感情を抑え込み、自らを機械へと変えようとしてきたはずの仮面が、勇太の真っ直ぐな瞳を前にして限界を迎える。
抑圧されていた後悔、怒り、そして何よりも「自分は間違っていたのではないか」という根源的な恐怖が、一気に決壊した。
「人間は弱く…そして姑息だ!! それはお前も日野!!!
お前がどんなに自分を信じ、気高い志を持とうとも、いずれ世界に押しつぶされ腐り、堕ちる!!!
大切な人のためでなく、自分自身を恥じて絶望するんだ!!
お前が光と信じて進む先には…虚無だ…!虚無だけが広がっている!!」
それは呪いの言葉ではない。鏡合わせの自分自身に対する、投げかけの咆哮だった。
「ぐっ…!!!ああああああああ!!!!!!!」
勇太が右手の鉄筋を引き抜き、その肉を裂く音さえ無視して、誠司へ突進する。
「篠原ァ!!!」
正面からぶつかってくる勇太の瞳には、一切の迷いが無い。誠司は、その真っ直ぐな光に射抜かれ、初めて自分が「守りたかったもの」を、自分の手で踏み躪っていたことを直視せざるを得なかった。



瓦礫の山となった都道四十三号線。雨は止む気配もなく、アスファルトを叩く無機質な音が、戦闘の余韻をかき消すように鳴り響いている。

勇太の網膜は、激痛とアドレナリンによって過剰なまでの解像度を誇っていた。右腕を貫通した鉄筋の冷たさと、そこから流れる生温かい血液の感触が、現実を痛いほどに突きつけてくる。

勇太が踏み込んだ瞬間、誠司は反射的に目を閉じた。それは、直撃を避けるための防御反応ではない。目の前の少年が放つ、瞳にかつての自分自身を焼かれることへの恐怖。直視すれば、自分が今立っている虚無が、ただの自己憐憫による逃避だったと認めざるを得ないからだ。

誠司が怯んだ、その一瞬の際。

瓦礫の奥、土埃と水煙の中で、シンドウラモンが動く。

離れた場所に落ちていた宝杵に充電（チャージ）した電撃をマーキングしていたマリブルモンへ帰還雷撃として放つ。

霧を切り裂き、唸りを上げてマリブルモンの左腕を切り裂く。

凄絶な火花とデータ剥離の轟音。

マリブルモンの硬質な体組織が、物理的衝撃に耐えきれずに砕け散った。

巨躯が、そのダメージに耐えきれず、ノイズを伴って縮小していく。

完全体の維持もままならない、マリブルモンのテクスチャーが急速に剥がれ落ち、シードラモンの姿へと強制退化させられた。

それと呼応するように、シンドウラモン自身の組成も揺らぐ。

金色の羽毛は散るがその瞳には勝利への執念が宿っていた。

「ぶちかましな…ッ勇ちゃん…！」

勇太は右腕の激痛を、精神の奥底へと追いやる。

彼は加速する。フェアリモンの脚が空気を圧縮し、爆発的な推進力を生み出した。

宙を舞い、シードラモンの頭上へとその身を運ぶ。

全身のバネを使い、右足を高く振り上げる。

シードラモンが抵抗を試みようとした瞬間、更にダメージが全身に広がりシードラモンとしての組成も崩れエリザモンに退化していく。

（電荷が、腕を貫いただけじゃない…！全身の細胞にも広がって…!!!まずい…!）



その光景を、誠司は呆然と見ていた。

脳内を駆け巡るのは、かつて自分が刑事として培った正義と、今日の前でそれを体現する少年…そして、かつて愛した家族の笑顔と、冷たい死体。思考が混沌の渦に巻き込まれ、現実感が急速に薄れていく。

(…俺は何をやっている…この少年は、俺が…捨てた…。)

自意識の防衛本能が、最期のあがきを見せた。

直感的に、誠司は横にいたエリザモンを突き飛ばした。

勇太の蹴りの勢いは止まらない。

その鋭い一撃が、盾を失った誠司の腹部を、まるで杭のように深く、重く食い込んだ。凄まじい衝撃。誠司の肉体が、くの字に折れ曲がり、背後のコンクリート壁へと叩きつけられる。

ヒビが入る壁。誠司の口から、鮮やかな赤色が弾け飛び、雨に混じって路面へと落ちた。

瓦礫の山へと吹き飛ばさるその直前、彼は確かにエリザモンを、自分の身を挺して守るようにして突き飛ばしていた。

一瞬の静寂。

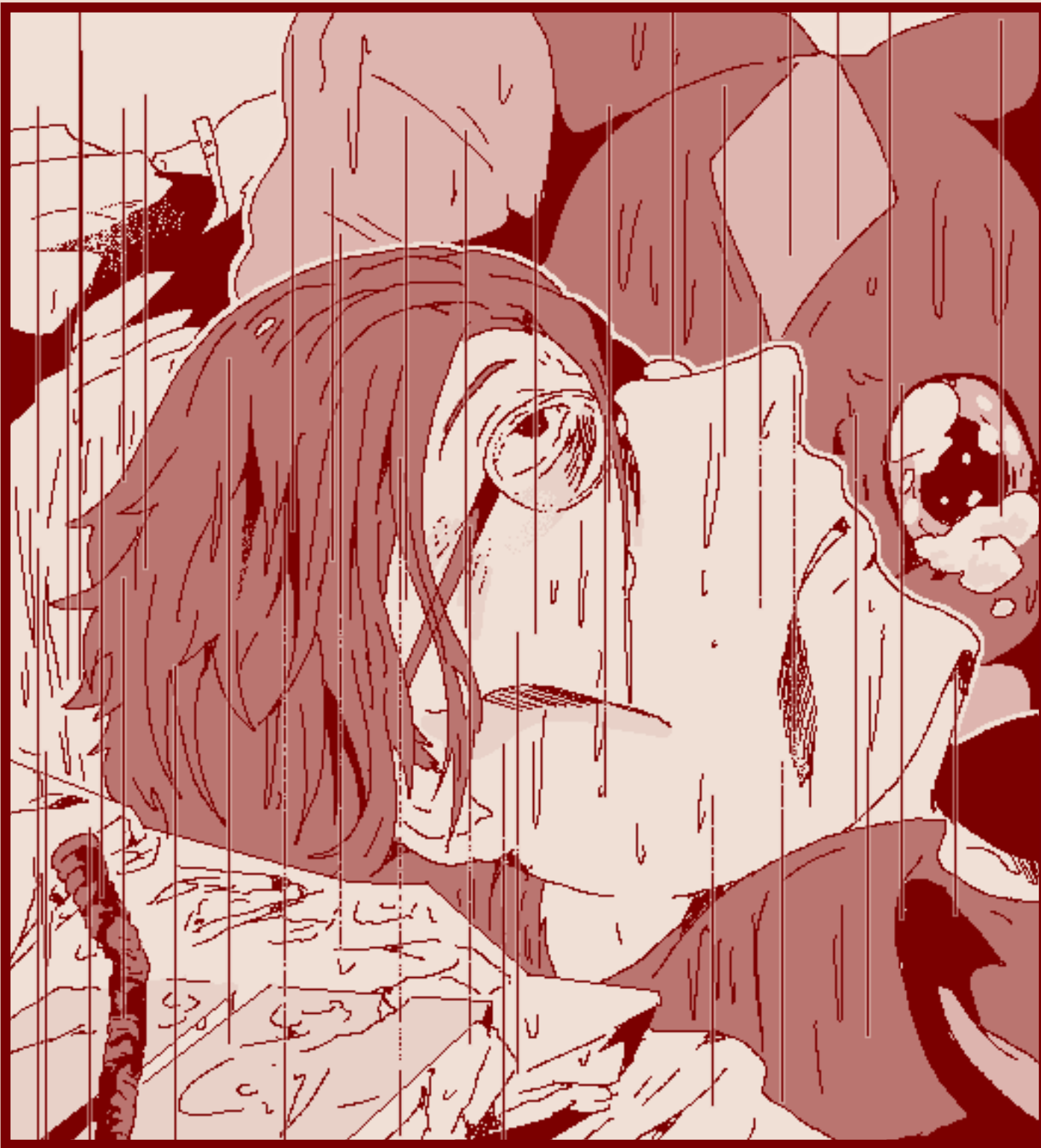
勇太は荒い呼吸を繰り返しながら、呆然と自らの拳を見つめた。手応えはあった。だが、最後に篠原が見せた行動は、彼に対する認識を大きく揺さぶった。

「あ……。」

勇太は足を引きずり、誠司の元へと駆け寄った。

動かない誠司の傍らで、突き飛ばされたエリザモンが、震える小さな体で彼の名を呼んでいる。

「パパ……パパ……！」



その声に、勇太の足が止まった。

パパ。その呼称の持つ意味を理解する前に、誠司の細い指が、小さく震えながらエリザモンの頭へと伸びる。

彼は血に汚れた手で、不器用に、しかし慈しむようにその小さな頭を撫でた。「…お前にはいつも…格好悪いところを見せてしまっているな。」

(それは…誰に。)

絞り出すような声。

誠司の目は、すでに濁りきっていたが、そこには確かにエリザモンを慮る色が混ざっていた。

勇太は無言でその光景を眺めるしかなかった。

闘争心は消えていた。ただ、深い徒労感と、自分の中にある感情の行き場を見失ったような虚無感が、冷たい雨とともに皮膚に張り付く。

「…死んでないんだな」

篠原は血まみれの口元をわずかに歪めた。

「なぜだ。…なぜ、手加減した。」

殺す絶好の機会だったはずだぞ、日野。」

誠司の問いかけに、勇太はしばし沈黙した。右腕の鉄筋が、ズキズキと神経を刺激する。

「…よく分からない…でも…多分あんたが、教団で俺に帰れと言ったから…そんなあんたが…その子を大事にしているのが…俺もヴォーボモンがいるから。」

でも…あんたは、エリザモンを庇った。

間違っていないと確信した…だから。」

その言葉は、誠司にとって予想外だったらしい。彼は薄く目を見開き、そして深く、深くため息を吐いた。

「…そうか。」

誠司は力なく首を振った。

「…これからどうする。」

勇太の問いに、誠司は空を見上げる。そこには厚い雲しかなく、神の慈悲など一片も感じられない灰色の空が広がっていた。

「やめだ…ふっ。」

「？」

「いや…ふっふふ…逃げだした先からまた逃げるんだなと思ってな。」

…この街を出て、ほとぼりが冷めたら自首する…目を背け続けたツケだ。

今度こそ…逃げないさ。」

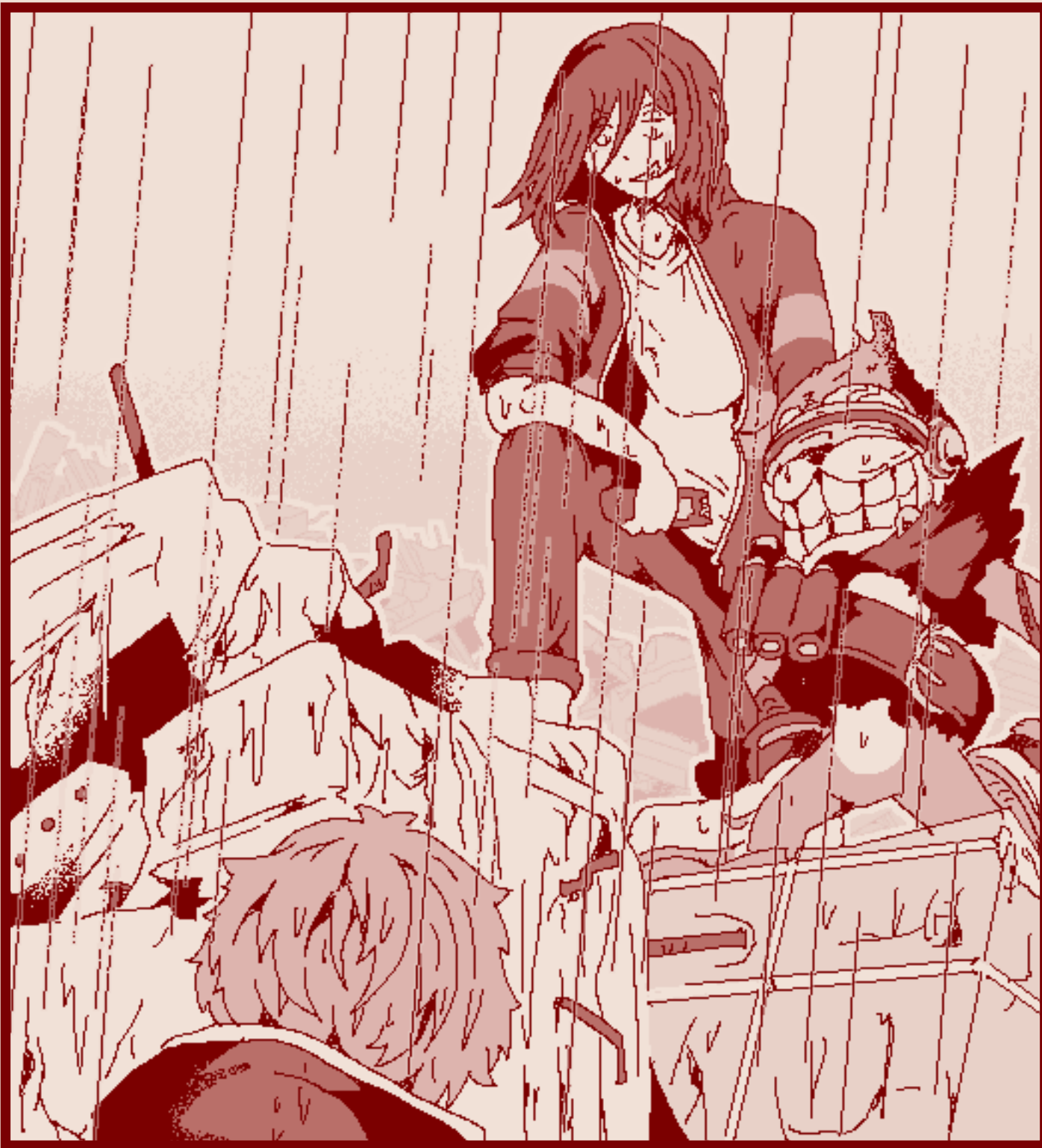
誠司は勇太に何かを言おうと口を開きかけたが、喉が熱いのか、それ以上言葉を紡ぐことはなかった。

彼はそのまま静かに瞳を閉じ、気絶したように動かなくなった。



その瞬間を TEZ の廃墟にいるセラフィモンも感じていた。
ダイナモン達をいなしていたな戦場の空気を一変させ一瞬の静寂が訪れた。
「そうですか…。」
セラフィモンが指を鳴らす。
その音は空間に響き渡り、即座に反応した。
瞬間、勇太達を見張っていたのか数十体の天使型のデジモンが一斉に姿を現した。

セラフィモンは言葉を発しない。ただ、冷酷な目でこれから起こるだろう未来を見ていた。
その視線には、仲間であった者に対する慈悲など微塵もなく、ただ「不要なバグ」を排除するという冷徹なプログラムがあるだけだった。
一斉に、天使型デジモンたちが勇太へ向けて牙を剥く。



絶体絶命の瞬間、飛び上がろうとする勇太は膝から落ちた。
数刻前の弛緩した空気で現れた疲労とダメージが今になりその体を崩した。
しかし、その刹那——。
瓦礫を蹴り上げ、土煙を割って現れたのは、クロスローダーが鈍い緑色の光であった。
周囲に待機していたスカモン軍団、マッハモン、ジャンクモンが一斉に展開する。
「遅えぜアンタら」
吐き捨てるよう言葉から、その手がクロスローダーを握りしめ、青白く発光させていた。
背後からスカモン軍団が、汚物と悪臭を撒き散らしながら、一斉に天使型デジモンたちへ向かって突撃を開始する。
物理的な威力は低い。だが、二十匹にも及ぶスカモンの群れは、敵の戦線を物理的に攪乱し、天使型デジモンたちの連携を寸断した。
「マッハモン！音響で頭をかち割れ！ターゲットモン、手当たり次第にぶっ飛ばせ！」
マッハモンがタイヤをスピーカーへと変形させ、耳をつんざくような超高周波のハウリングを放射した。天使型デジモンたちが苦悶し、空中でバランスを崩す。その隙を、巨大な武器を振り回すジャンクモンが叩き伏せ、ターゲットモンが圧倒的な管力で追撃を加える。
天使型デジモンを一気に崩し切った。
瓦礫の上に立ち、斜に構えたようなへらついた笑顔があった。
「よお、勇太。
相変わらずボロボロだなおめえは。」
「おう！勇太！俺っちと会えなくて寂しかったか！」
戦場に再び緊張が走る中、ターゲットモンと視線を交わし、不敵な口元を作る。
「慎平さん!!」
そこには、DWで別れたはずの三下 慎平達の姿があった。